へ13
3907
2

門 へ13
3907
号 2

春秋毎
しるの
さま
二屋ん上

京山作
豊國画

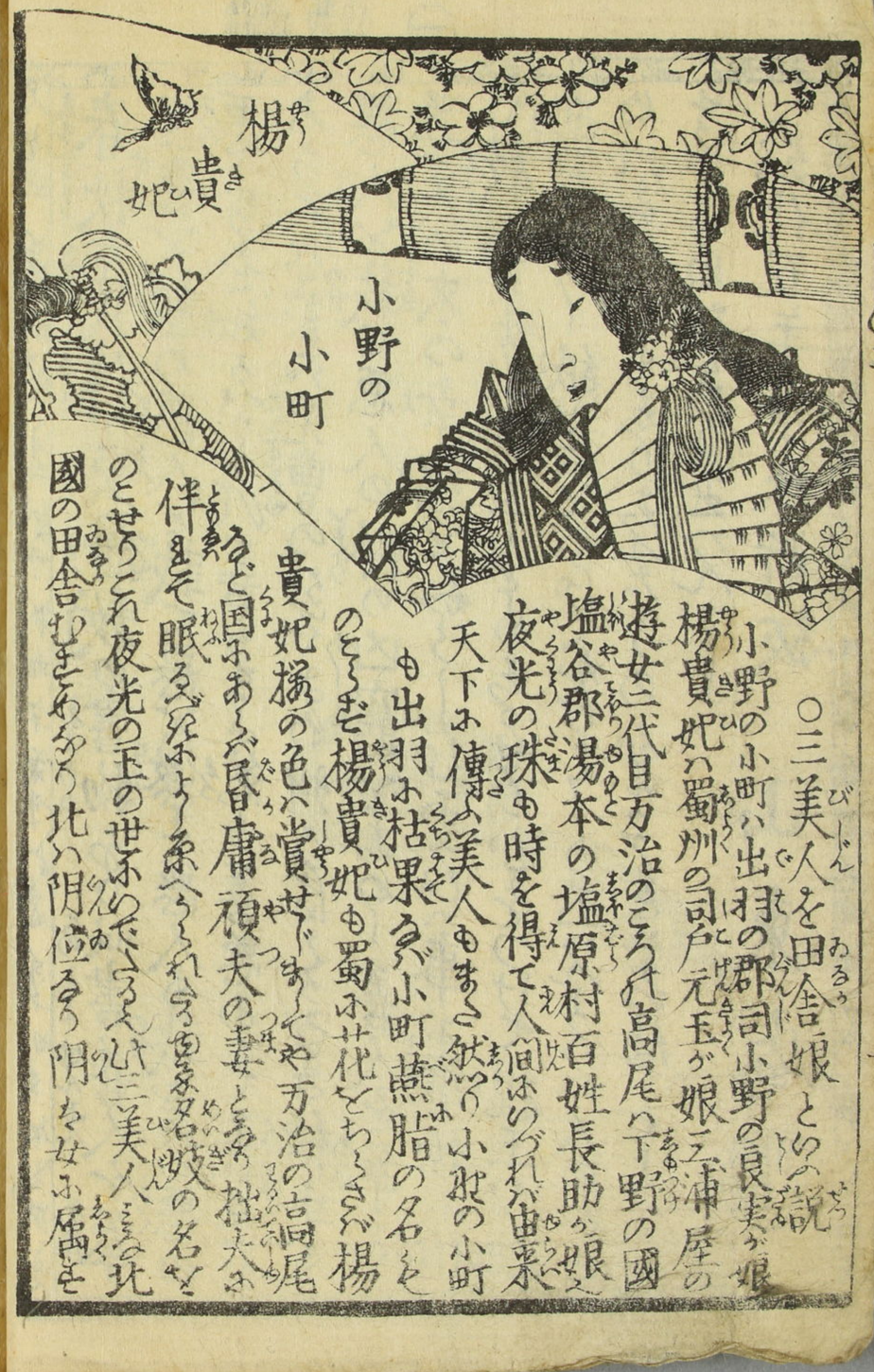
門人
国麿画

弘化五年春

榮久堂
版

春秋左氏傳といふ世教の書物あり此書善人を挙て善を勧め悪人を載て悪を懲し悪人も載ざれば悪の悪しきを知るべからず善も亦然り善悪ありて善悪をわきまへさせんが為なり児曹のあぐさあり卅五ページ

悪人を載て悪人の終の凶窮をあらはし善人を挙て善人の末の幸福を知らしむるひい事ハ準物ハ附て教訓ゲンきき事をもあるせりをつけて視玉づ独楽をまつ紙鳶をあげてかけてり玉ふんよろふ人のいとめいとをもあんだりまんだりのかまぐまハ為をよくくまくまくま



○三美人を田舍娘といの説

小野の小町は出羽の郡司小野の良実が娘楊貴妃は蜀州の司戸元玉が娘三浦屋の遊女二代目万治のころ高尾は下野の國塩谷郡湯本の塩原村百姓長助が娘夜光の珠も時を得て人間ふのづれが由来天下ふ傳ふ美人もまさ然の小野の小町も出羽ふ枯果る小町燕脂の名を

のこ〜ぞ楊貴妃も蜀ふ花をちらさば楊貴妃揚の色ふ賞せ〜まして万治の高尾

伴まそ眠るべ昏庸頑夫の妻とまう拙夫ふ

のとせりこれ夜光の玉の世ふのでさるべ三美人ふ

國の田舍むまれの北ふ閉位る閉を女ふ屬を

まべ北国ふ美人を出さ〜ふ北方ふ佳人あり

とまいの江河清潔れば女ふ佳麗多し

と謝啓肇淵が五雜俎ふ〜も理

水の清き国の女ふかるべ色白し布

の白も越後の白縮ふまさるる

あり其国北るその地水清

ふさまざまちごの女ふ美し

世ふもいまりこれふりて此名

ざるしふいづ〜る小ようをあち

ごの女とーのちふしふ

美人あり一事を一部の

趣向とし三美人をあふ

いづて例の口繪のかり

とぞあーける

しと二屋くんの上

第一話

今はむかしかまくらのゆで男をたてる五尺そのあるいらぶつまがこんそのあらうこぶん世でのことなるまでかまくらとかけあちるすこしあちこの者をあざこくまるの村のりのるるし

四さのこのそのみるぞゆそ雨

あいそのやとりのあんじゃうたのきてこまろうあんまのさのわんのるまゆ大

とうさこあのんふろうされる孫作ごつまあらひおすめ小上

とてもッふるるとうれかまくらうんぎてこれもけぞこうそ日をこうし

あのふあいそぢひ雨ろうの

あまくこうゆきこひあれあろつのえんふこうけ

ムりむときて

おえふひぞふあいとあんあ西のるまるれと女るれいてへこのあけふのでのことと

五尺そのあるいらぶ女房おちん

小ようのちゑ

小ようぶ母おいろ

あるで村のあるまでのあるひ世でのことをいるのあるのとも沿ちまゆとあるまゆ初へんれいらくあるせう

○さて世でのこと

おいらひふむうひ・おめくそうしこうけでひすめをつれ女の

対でるぐとかまくらくゆくのぞ「おいらひ」されぞぞさえき

あまくへ十えの内まそでくうぶ村ふあまえしこと

ゆえあってあうぶにてうぶあやちどのい村でのにまく「ゆでのこと」ちげれあれもたぶくあうら

れくよ「おいらひ」こうまうぶ十八のこうけん

あゆうまあまぶまうのらうゆみ山川

こうぶうとのふ人をむとれこうひうまぶら

でまそこうれん目あやちこあぶえそ

らま「こと」れくくちーやる人であるさ

「おいらひ」こちの人も名をあるるあて二代目の

まこ作をそけえあるのでーゆあまこあの

人さんゆもたくれまくえのあいもえせん

あくまとやらあくうりのあうるさえある

さうえのんうあうふ一年とのふあくでくりこれ

まんぶーしてえのゆうこちの人をゆまこうさんと

あうるうりのあたうこちの人ハりけあってゆえいさと

てうあやうも村みくまをあうぶをたうふるまう

ゆくのでこれえも「こと」れくこれいあのらくゆえるのさこと

るぞとうまそそまとのくこれまゆふりまれゆたく

おのいいうこもゆとうきにかたれとうりたりのうえき

の毒くうんとのうけふうろくるゆあのふとうくふう

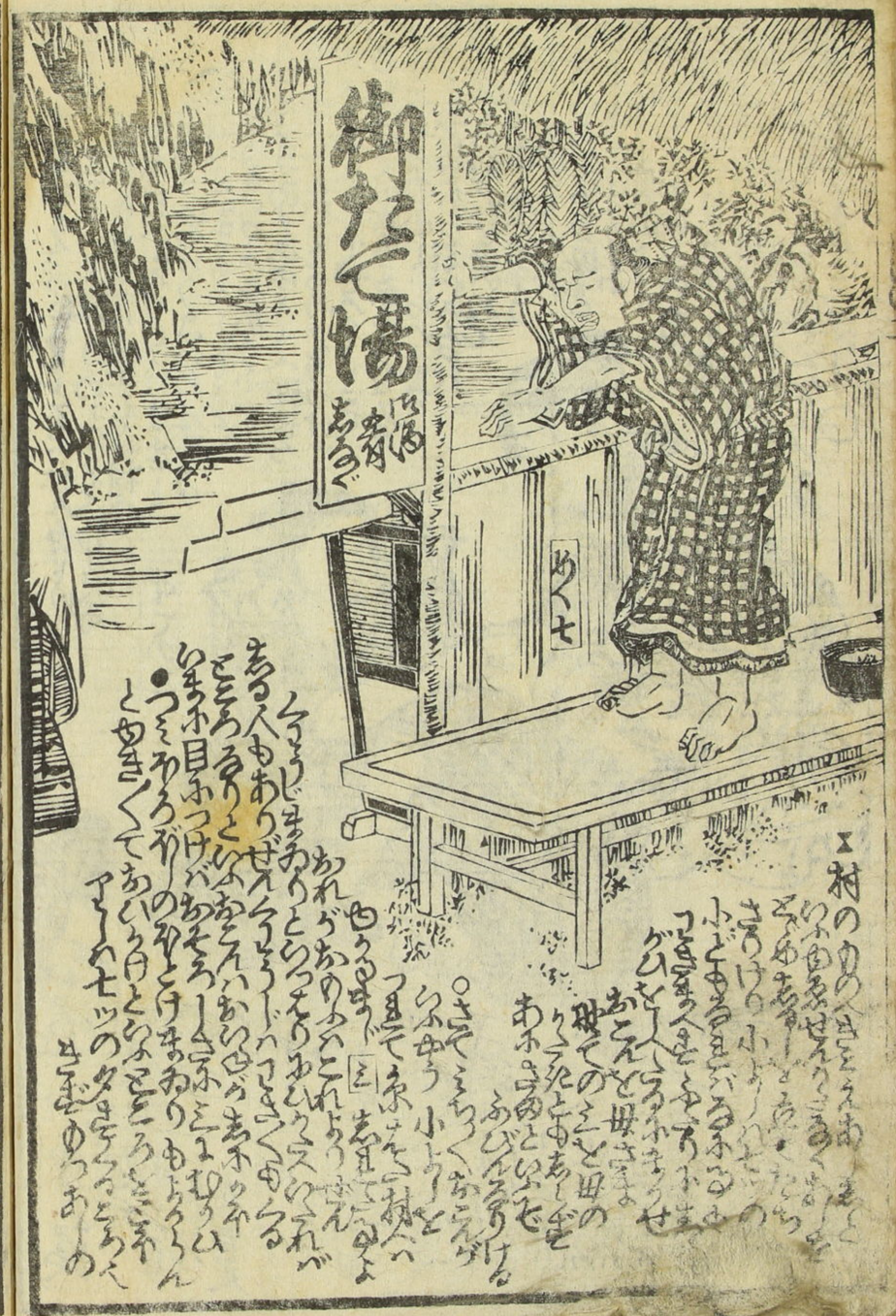
「ゆでのこと」

みでのこと
おとえ

あらまし
あんまの
さらわん

しやうしふちゞみ
あるく小ども見れども
母かつてあるる七夜の
ひまあとよりあるう
ゝもあれが
さいねんちうみ
ごろいろもやうもちりつゝ
あいたるこゝの人見れがワゞいちぞん
あるくらくもち丞と
かのよりわひのこゝろわいちり
あるくのうゝとけれが村さき
ちゞめうろあとゝてわ
泥のりさいちやうつれが
村をさいふやうつまる二人り
まであるるりこゝさら
あるゝくまりのさうぐん
けゞまゝこゝとゝろいるる
りのゝりまりあふ
きさまのやねゞえも
できるさうときあんのう
ろへうゞめてゝこゝやまゝと
きゝてあるゝいゝてゝちさり
けり
ひさてゝさいねんの
ろもふ小ようゝねゝ
肘でのこゝ
かゝせゝる
母のあるゝふ
ろりつゝ
一
さいねん
二
コレかゝさま
ゝまもちゞの
ゝゝてゝくゞされよ
ゝゝさまゝゝこゝろれ
ゝまゝへゝこゝろき
こゝーやゝまゝろ
ろゝとゝまゝせう
だうせうとゝゝをゝあげる
ゝまゝりるゝたゝゝいさまゞ世ごろ
ゝゝんゝゝあのゝゝさゝゝろゝてゝゝろゝ
ゝゝくゞゝゝあゝゝれゝゝかゝゝをゝゝ小ようを
三
四
たゞきあゞゝ
ゝゝくゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝ

おこん
小ようー
おでのこと
第二席
かそあるひ
おこん金百足


御たて場
めくち

あとん
小よし

おとん
小よし

六二弟
でんじ弟
文代太七

やぶやのりんきよ
六二兄
文代太山おでん弟
その二

あとん
肥でのこと
山ねこ二年
六三年
小ゥ

豐國画

二編

京山作
豐國画

大店や
はちまき

とし三べん上のとり

あ代
太七

驛路屋

あとへ
みくまの口よせ
百あとゆと
なとをまそなやまくぼの
小ようの百あのやくそくふ
きえめてあたとたとうる

下へつづく

とろ二へん下のまき

上冊のつゞきのまき

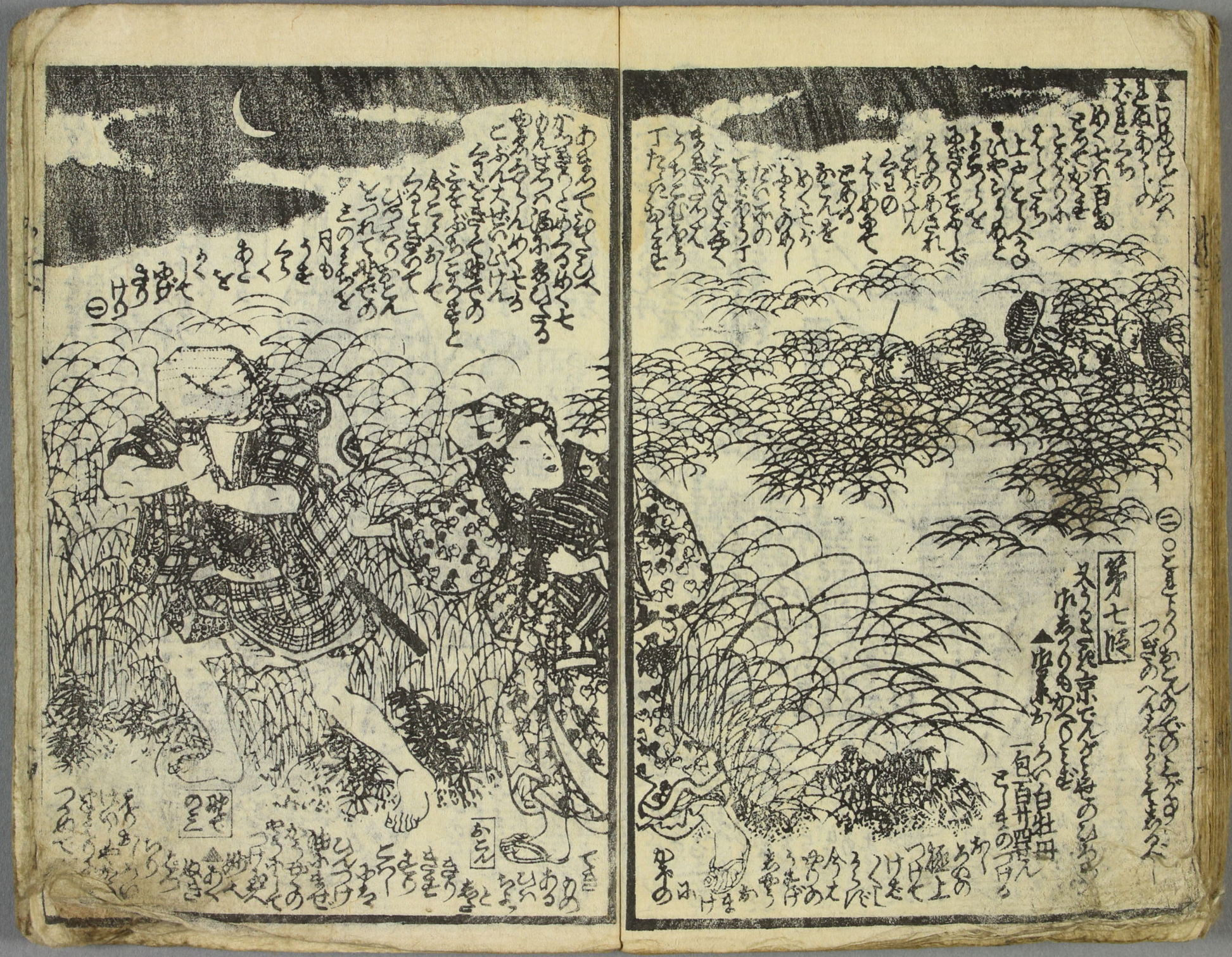
第五話

ふ七
ふよう
大庄屋山ちでんめ弁

おとん
映ごのこ

第六段
めくり七

おとん
めくり七



六三郎
小よのちふじ

だん七
でん次郎

太七
でんたら
(二)おのく
○さそたなきの角べえ
●ぬーらア小山ア
きそあんざいが
の用をさそはくよ
代のた七次へ
(一)

たぬきの角べえ

㊁あまてくちてよるいさえもりぞ人ゆもかるもあちどろどの

うつのらいつけでもあわうくをぶちゆでさのざめらいたせいぐぶたうげどこまるう用ゆさろ女人きのもろくぶぐんひころされをゆとをぶゆくあそまけるゆでんこうかごの内よりゆど五人らのたうげをあろうれんやあるえのぞくゆさえとうけあとらゆ右七らのあをらゆけれがかりうどやくそでさもあるうゆとらゆでんこうかごよりこあうけ●あくくがあとえのどうそたうげの下へこまるべしあもものあさえかくうくまんやとらゆけれがあまるう㊀

㊁あくうべーとらゆ●こうこがどそこまるべえやどもたあきの角べあゆきてちくるうのをやくくくしてふのとの刺ひぐいけう

第八段

たびのまちろ

一丁のど

らやまのものゝ

ますてゝ

かの㊀

㊁かりうとう

まれとらひい

ずこちあまろ

おれくこのあそ

㊃ゆみそのゆめひ

こうふせんる

でんこうふこ

ろうりかるこ

かまくらゆそ

ろうあくこゆ

こうけろ

こぎふひも

きろいのの

ろうと

らの一日

世のこと

ぎとらの

ぎうふ

もうまど

かうべ

㊄

㊅ろうそどふ

一日ふもどん

そどうをうを

べ一ゆ一天こう

さまスのつとあ

㊆

ろうふ

人のにきのこいひあ

けのはたひこにゆ

るもらひふりけり

つーふべり

㊇ろうふせんる

ろくたちうどう

そのこうこゆを

れがいかりのかけ

づりひこもへ

ふるのうりあち

ひへ山どのこちら

ゆくあた人なりの

かうひもうれがまり

やもくうぐーうこぞ

六三郎ふう

ろどいこうのうえ

らがいかりうのち

かうづりのうえうりそ

うこやむりまこのくあり

たえしこのけーれいよけれと

でえこうふ名ちこの人山くの

けーなもありうこうも

ふうどん馬やふるこうで

ちくざーまうしをかくま

ちそのあでくらしかけりのハ

あまのりふあこそまこ名の

そてうをけーかうこのあくひこハ

ア名ちこをまうグーむやうくせんを

ひうーこうふまうりんのあこまれ㊂

六三弟
六七

第十話

榮久堂刊行藏板略目

永花百人一首文字抄

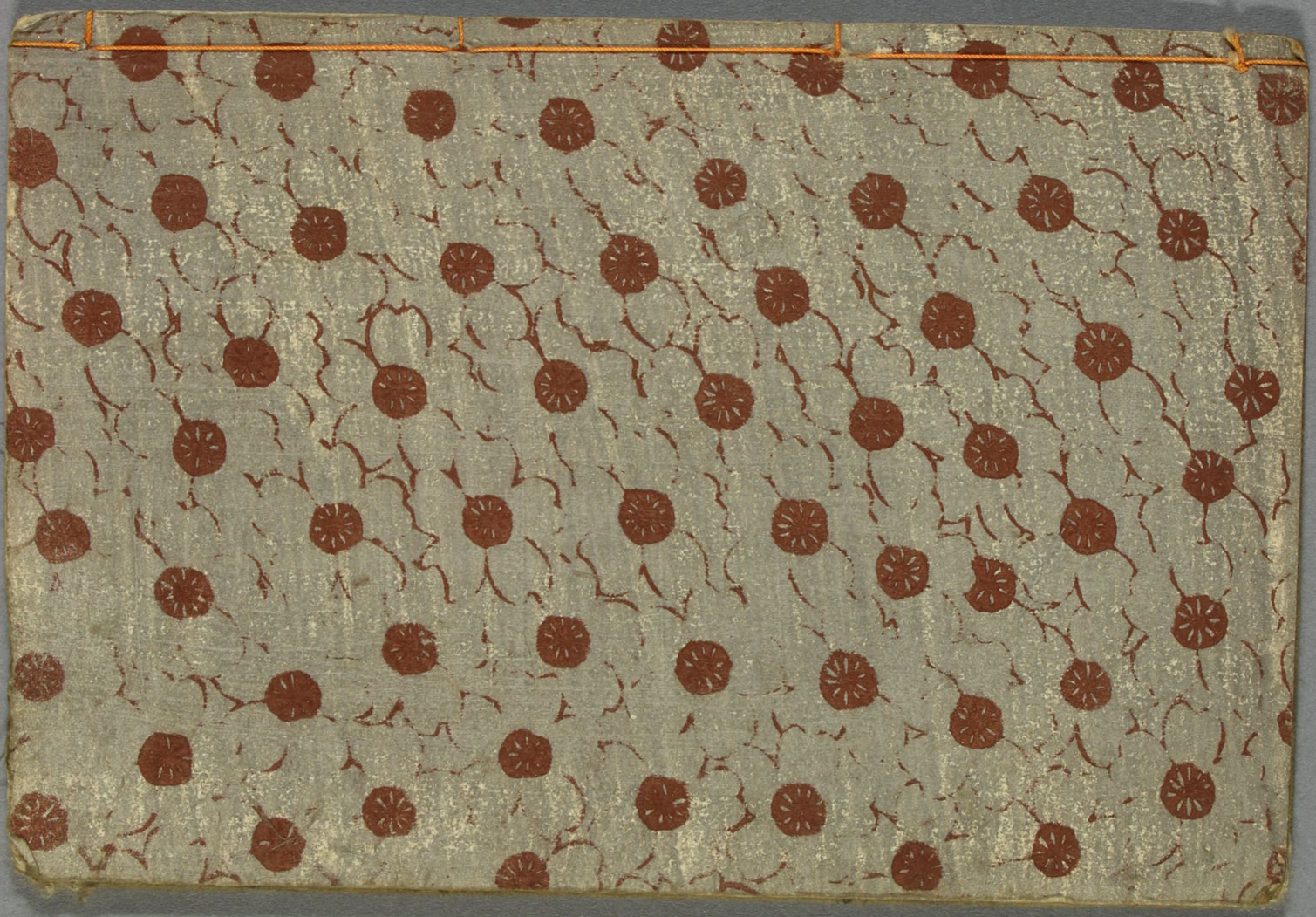
首書繪抄

源氏六十四帖

小錦絵

御誂深逢山鹿子

六編揃

縁結妹脊双六

東都錦繪所
江戸ゝ町おやぢ橋角
山本平吉梓